

「英語でライフデザイン」

～使える英語とキャリア教育で促す人格形成～

永倉 由里 新妻 明子 デイヴィッド・ハント
丸尾 和子 小長井邦男 市川 真矢 小田 寛人

キーワード／英語コミュニケーション、キャリア教育、カリキュラム

1. はじめに

産業界、経済界のみならず、教育現場も「グローバル化」「IT化」「少子高齢化」などによる急激な変化への対応を迫られている。しかし、豊かな時代にあって「ゆとり世代」「若年齢化」を感じさせる学生が多い。また、「グローバル人材」の育成が叫ばれて久しいが、一般に一部のエリートを対象にしている感があり、学生の多くは「内向き傾向」が強い。

一方、我が国では「新卒での就職活動」が重要視されることから、大学が「就職予備校」と化していると揶揄されているが、そこでは、それまでの「知識偏重」「大学入試対策中心」の教育とは打って変わって「コミュニケーション力」「主体的実行力」「チームワーク力」が強くと求められる。それまで「過去問題集」や「頻出問題集」などで試験に備えるのが典型的な学び方とされてきた者たちには、短期間での直接的効果を期待することが難しいこれらの能力を求められても戸惑うばかりであろう。生来の人柄と取られる傾向もあり、容易には方策が思い当たらないため、応急措置的な「面接マニュアル」などが人気を博している。

このような現状に、教職員は「このままでよいはずはない」と感じながらも、日々の教育や業務に追われている。一方、学生はと言えば、漠然と「生きる力を養いたい」「積極的にになりたい」「自信を持ちたい」「自分らしさを表現したい」などと感じている者が多い。

こうした中、英語英文科生のために練り上げて作成したのが、現行の英語英文科カリキュラムであり、2011年の施行開始から今年度で4年目を迎えている。そこで本稿では、英語英文科専任教員全員で、この現行カリキュラムの特長を再確認し、その実施状況を検証するとともに、問題点、改善点を挙げる。第三者評価の報告書と重なる部分が多々あるが、特に授業担当者あるいはクラス担任として英語英文科教員が学生との関わりの中で感じている「学生の変容（成長の様子）」を報告し、今後の教育活動に活かしたい。

2. 英語英文科の教育理念とカリキュラムポリシー

英語英文科は、「より高きを目指して学び続ける」という建学の精神を踏まえて以下のように教育目標を設定している。

国際コミュニケーション手段としての英語及びその文化の学修を通して、学生の国際性及び社会性を伸ばす教育を行う。そして、自らのライフデザインを具体化することのできる人材を育成することを目的としている。（常葉大学短期大学部『学生生活ハンドブック』p.9）

この教育目標をより具体化し「ディプロマポリシー（学位授与の方針）」として、「『使える英語』の運用能力を高めていること」「異文化への理解や適応力を身に付けていること」「国際社会に貢献できる人材へと成長していること」の3点を掲げている。

従って、英語英文科カリキュラム（専門教育科目）は、これら3点を柱とし、①「使える英語」の習得に向け、特に「英語で話せるようになること」を目指し、英語母語話者（ネイティブ）の外国人教員による授業を多く設定し、②異文化への理解を深め、国際性や人間性を身につけるように工夫されている。また、「英語でライフデザイン」という基本理念を実現するために、③卒業後の進路を支援するためのキャリア教育並びに各種資格・検定に向けた科目も多く設定している。

3. 現行カリキュラム編成の背景

2008年の学生生活アンケート調査において、英語英文科は、他科と比べ多くの面で学生の満足度が低いことが明らかとなった。その理由および学生のニーズを探るため、英語英文科独自の詳細な調査を行うことにした。

まず、2009年度の新入生60名に対し、自己決定理論（Deci et al. 2002）を参考に作成した質問紙（資料1）を使用し、内発的動機的前提条件とされる3つの心理的条件、「自律性」「有能性」「関係性」の充足度を調査した。その結果、内発的動機的前提条件とされる3つの心理的条件の中では「関係性」に対する充足度が高く、「有能性」に対する充足度はかなり低いことがわかった（図1）。廣森（2006）にもあるように、特に「有能感」を持てるかどうか動機づけを左右する。つまり、「自信の欠如」から主体的、積極的になりにくいのではないかと推測される。

また、学生が高めたい力として挙げたものは優先度（5件法の平均値）の高い順に表1の通りであった。

最も高めたいのは当然のことながら「英語の能力」であった。入学時の英語力にはかなりの隔たりはあるものの、英語の力、特に「話す力」を高めたいと望んでいることがわかった。同時に「無理のないレベルで、プレッシャーを感じることなく、居心地の良い環境で学びたい」「ネイティブの授業が多い方が良い」と考えていることがわかった。

高めたい力として挙げた2位以下の項目は、本学で掲げる「ライフデザイン教育」や企業が求める社会人基礎力と重なる。知識の提供を得意とする教員にとっては難しい課題を突き付けられたことになるが、初等・中等教育と同様、短大・大学においてもすべての学びが人格形成に帰すべきであり、教員はそのための人間教育力

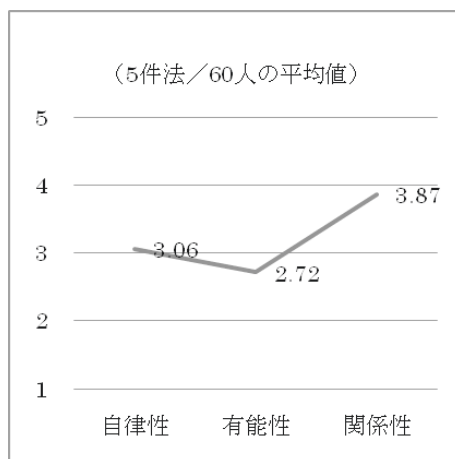


図1 3つの心理条件の充足度

表1 短大で高めたい力

順位	<高めたい力>	平均
1	英語の能力	4.73
2	考えを伝える力	4.48
3	積極性	4.38
4	行動力	4.38
5	意見を持つ力	4.35
6	知的好奇心	4.19
7	協力する力	4.19
8	計画性	4.19
9	忍耐力	4.17
10	一般教養	4.02
11	日本語の能力	3.85
12	PC活用能力	3.75

を含む「授業力」を高めなければならない。その前提として、我々教員は、学生たちがこれまで受けてきた限られた尺度での評価に囚われず、学生たちの様々な方向への成長の可能性を信じ、期待を込めて教育活動に当てるべきである。

4. 外国人教師の活用方針 ～ “Real Communication” ～

英語英文科でのネイティブ・スピーカー教員の活用方針は、本質的には「“Real Communication”（以下 RC）の実践に導く環境を創り出すこと」と要約することができる。英語英文科には、専任で1名、非常勤で6名のネイティブ・スピーカー教員がおり、各々が豊富な経験と高い能力を有し、独自の教授方法やスタイルを持っている。それらを尊重し、同一の教授方法を強制するようなことは一切していない。ただ一つ同意を得ていることは、授業内で「英語のみを使用する」という点である。こうして各教室で生まれる実践における多様性こそが現体制の特長となっている。

実のところ、英語英文科のネイティブ・スピーカー教員は学生間で交わされる日本語を理解できるため、学生の英語がたつなかつたとしても、問題に対処したり質問に応じたりすることはできる。しかし、そのことに学生たちは気づいていない。教員が日本語を話せることを隠し、学生たちの日本語を理解できないように装うことで、教員と学生とのコミュニケーションは必然的に英語で行われることになる。あらゆる状況において誠実に振る舞うことが大切ではあるが、授業実践において貫くべきは RC の促進であり、教員がそのためのちょっとした偽装をすることは認められるべきであろう。

ここでいう “Real Communication” とは、お互いにとって「意味のある」やり取りを「快適に理解し合える言語」で行うことである。コミュニケーションは「意味のある」「リアルな」ものである時にのみ成り立ち、満足感、達成感を得られ、言語習得が促進される。

ここで、RC の定義について広義と狭義の解釈の区別をしておきたい。狭義の解釈では、RC は教師と個々の学生との間で交わされる「英語による」やり取りを指す。しかし、広義の解釈では「言葉による」やり取りに限らず、相手に理解され、興味深く有益なものであれば、「言葉によらない」表情、動作なども RC の要素だと考えている。こうした要素は、特に、学生が疑問を感じたり好奇心を刺激されたりして思考を巡らせる際に窺われる。

先程、ネイティブ・スピーカー教員の多くが「日本語を理解し話すことができる」と述べたが、日本語の読み書きの能力まで高いというネイティブ・スピーカーは稀である。従って、書き言葉でコミュニケーションを図ろうとするときに、日本語を使おうとする学生はいない。現行カリキュラムの中で、書き言葉における “Real Communication” を追求するために設けられているのが「Eメールダイアリー」である。ここでの RC は、第三者に知られることなく、学生にとっては最も自分らしい表現のできる場となっている。

5. 現行カリキュラムに込めた授業哲学～「英語でライフデザイン」を促すために～

現行カリキュラムは、前述のカリキュラムポリシーを具現化するために作成され、2011年4月より施行されている。そこには長きに渡り英語英文科において受け継がれている「ティーチング・フィロソフィ（授業哲学）」と言えるものがある。ここでは、精神論に留まらず、先行研究からの知見を参照し、まずはその科学的な妥当性を検証したい。そして、その授業哲学が現行カリキュラムにおいて、特に「動機づけ」と「主体的な学び」について

ラスの効果を生んでいることを強調したいと思う。

英語英文科の「ティーチング・フィロソフィ（授業哲学）」の第一は、「学生の可能性を信じ、一人ひとりを尊重する」ことである。その上で、学生が求める「英語コミュニケーション能力」を高め、社会人基礎力につながる「能動的行動」を促す枠組みを設定しようとしている。つまり、両手を広げて学生を受けとめ、誰もが「安心して短大に赴きそこでの学びにより成長し得る」と感じられる雰囲気 constraints、成長に期待を寄せようというものである。ここで、よく知られているマズローの欲求階層説（Maslow, 1970）を引用したい。マズローは、人間の欲求は5段階のピラミッドのように構成されており、低次の基本的な欲求が満たされてはじめて上位の欲求が芽生えていくものとしている。基本的欲求を低次から列記すると表2の通りである。

表2 マズローの基本的欲求

1	生理的欲求 (Physiological needs)	生きていくための基本的・本能的な欲求（食欲、睡眠欲など）
2	安全欲求 (Safety needs)	安全・安定・安心・秩序を求める欲求
3	社会的欲求、愛の欲求 (Social needs / Love and belonging)	集団への帰属や愛情を求める欲求
4	尊厳欲求 (Esteem)	他者から認められたい、尊敬されたいという欲求
5	自己実現欲求 (Self-actualization)	自分を高めたい、成長を追求したいという欲求

基本的な三つの欲求（生理的欲求、安全の欲求、社会的欲求）を学生の立場で考えてみると、良好な体調で出席し、安心できる雰囲気と自分の居場所のある空間で学びたいということであろう。これらが満たされてはじめて、友人などから価値ある存在だと認められたい、更には様々なことに挑戦したいといった上位の欲求（尊厳欲求、自己実現欲求）が生まれてくる。

英語英文科には、個々の教員としても、教職員集団としても、学生一人ひとりを大切に、前向きな気持ちが醸成される独特の雰囲気がある。これはまさにマズローの言う「基本的な三欲求」を満たしているからに他ならない。入学当初の1年生と比較し、2年生の表情の柔らかさ、意欲・行動力には目を見張るものがある。

次に、言及したいのが「主体的な学び」を促す“体験型”授業の効用である。アメリカの高等教育の権威ボイヤー（1988）は、「すべての真の学習は、受動的ではなく能動的な性格を持つ。そこでは単なる記憶力ではなく、精神（mind）の働きがなければならない。学習とは発見の過程であり、そこでは講師ではなく学生が主役になる」と述べている。

いわゆる“体験型”“研修型”の授業のみならず、必修科目として設定した外国人教員が担当する少人数制の会話中心の授業についても学生の主体的学習を強く促していることに注目したい。授業評価の高い外国人教員の会話中心の科目についてその高い授業評価の理由を探った結果、日本人が担当する科目では得てして受動的になりがちなのに対し、少人数でのオール・イングリッシュの授業では、常に適度な緊張と集中を強いられ、頭と心のスイッチがオンの状態となっており、それゆえに、聞き取れた英語の量の如何に関わらず、喜びと満

足を得ていることが浮き彫りになった（永倉、2009）。

“体験型”“研修型”の科目の多くは普段とは異なる学外環境で行われる。それゆえの期待感、緊張感も高まり、結果として能動的な態度で臨むことになる。心と頭のスイッチがオンの状態で行動するわけだから、自ずと「楽しさ」や「満足感」が増す。「興味関心」や「楽しさ」だけでなく、特に“研修型”の科目は、「友達と共に参加し、ある体験を享受する」ことにより「有能感」に準ずるものが得られ、学生同士の「関係性」にも良い影響を与える。ふとした瞬間に個性や才能が発揮されたり、誰かの役に立てたりするからである。

英語英文科専門科目のカリキュラム表に、前述のカリキュラムポリシーとして謳った3つの柱と「能動的行動」を促進するものに記号を追記したものが資料2のカリキュラム・マップである。いかに主体的態度で臨むことになる科目が多く設定されているかに注目していただきたい。

なお、履修指導の際には、目指す職業や資格取得が明確な場合にも、そうでない場合にも、科目群（ユニット）単位での履修を勧めている。もちろん、学生は英語英文科を志望し入試を経て入学しているが、明確な目的意識をもつ者ばかりではない。そうした学生たちも含め、英語のみならず総合的対人コミュニケーション能力を育成し、充実したキャリア教育により個々の進路を支援するカリキュラムの特長が活かされるよう指導している。

また、科目数については、旧カリキュラムで85科目だったものを63科目に絞った。一見、選択肢が減ったように見えるが、必ず履修してほしい科目群を「ながれ」と「つながり」をもって効率よく学ぶ結果となり、学生にとってはカリキュラムの特長を享受し易くなっている。

6. カリキュラムの実施状況と学生の変容

この章では、英語英文科現行カリキュラムの科目群ごとに、実施状況、学生の変容に加え、今後の改善点を述べていく。

6.1 外国人教員がチームで担当する「英語で」教え、「英語で」学ぶ授業

現行カリキュラムでは、ネイティブ・スピーカー教員がチームで担当する12科目が必修となっている。選択科目も含め、ネイティブ・スピーカーが担当する科目群が、すべての学生の学習態度の変容に大きな影響を与えているのは明確な事実である。

<実施状況>

必修科目群では、「Basic Skills A/B/C/D」「Oral A/B/C/D」「Culture Studies A/B/C/D」という3つの必修ユニットが2年間4学期に渡って履修される。これらの科目すべてをネイティブ・スピーカー教員が担当し、1つの科目を同時に複数の教員が授業展開するという意味での「チーム・ティーチング」が行われているが、グループ編成については科目によって違いがある。

「Basic Skills」と「Oral」に関しては、学生の習熟度に応じたグループ分けを行っている。新入生には3～4人のグループで「プレイスメント・インタビュー」を実施し、それによってグループを決定する。グループ編成、授業での指導方針、評価基準などについて話し合いの時間をもち、合意を得た上で指導にあたっている。

「Culture Studies」は学生の習熟度によらないグループに分け、出身、専門、特技の異な

るネイティブ教員の特性を活かして、ローテーション制を実施している。学生はどのグループも半期 15 回の授業において 5 人の教員による 3 回（1 ブロック）ずつ、計 5 ブロックの授業を受けることになる。従って、2 年間で 20 ブロック（5 ブロック×4 期）を履修することになる。それぞれの授業内容は、教員全員での協議の後、各々の教員の責任で行われ、学生の反応を考慮しながら修正を加えられることもある。これにより非常に広い範囲の話題を扱うことが可能になる。

前述した必修科目群に加えて、学生は様々なネイティブ・スピーカーによる選択科目を履修することができる。具体的には、応用ユニットの「Advanced Listening」「Advanced Speaking」「Advanced Reading」「Advanced Writing」や「研究セミナー」「Life English」のいくつかである。

ネイティブ・スピーカーと接することができる授業は教室内で実施される科目に限られているわけではない。おそらく実際に最も価値のある学習体験は、コミュニケーションを取り取りが教室外で起こる場合に得られるものである。

毎年 1 年生のほぼ全員が履修する「語学キャンプ」は、教室での授業と学内および学外での 2 回のキャンプによって、日本人以外の英語話者（必ずしも全員が英語のネイティブ・スピーカーとは限らない）と意見や考えを交換し、交流できる機会となっている。そして、後に続く「海外短期留学」と「海外長期留学」への動機づけともなっている。

前述の「E メールダイアリー」については、学生と教員が 1 対 1 で秘密性が厳密に守られた条件の下で、様々な話題に関して週 1 回のペースで英語での E メールを交換している。

教室において非常勤のネイティブ・スピーカー教員と接する時間が多いのは当然のことであるが、多くのネイティブ・スピーカー教員が、必修科目の授業がある火、水、金曜日に本学のキャンパスに集まる。彼らに頻繁に出会う機会があることは、学習環境をより国際化することにつながっており、言語教育という観点において「リアルな」環境を創り出していると言える。

< 学生の変容 >

ここまで述べた必修科目群と選択科目群では、学生のフィードバック、反応、評価を真摯に受け止め、授業内容、教授法の改善につなげている。これはまた、教員自身の授業力評価においても重要な要素である。ここで例を 1 つ挙げてみよう。「Culture Studies」の科目群では 1 つのブロック終了後に学生に匿名で次の質問を含むアンケート調査を実施している。

- 授業で使われていた英語をどのくらい理解することができたか
- 授業で扱われた話題についてどのくらい理解できたか
- 扱われた話題についてどのくらい興味関心を持ったか
- どの程度新しい情報が得られたか
- 自分自身の努力をどの程度評価することができるか

また、学生が授業の内容や方法に関して感じたことやコメントなどを自由に記述するスペースも設けている。こうした取り組みとその分析により、学生の理解度、話題に関する興味関心、自己努力の程度が高まり、学生にとって「プラスの変容」が起きていることが確

認されている。

<改善点>

多くのネイティブ・スピーカー教員が直面している二つのジレンマがある。一つは学生の実情に配慮し、かつRCを享受させながらも、ある程度の内容とレベルを保持したいという点と、どの程度学生の要求に合わせるかという点である。例えば、教科書の活動や練習問題よりむしろその時の学生の関心事に話題が移って行き、よりリアルなやり取りがなされる場合がある。しかし、これは決して教科書等の役割を軽んじているのではなく、学生の主体的な姿勢を受け止め、RCの成立を助けているのである。

もう一つは、会話やディスカッションを行う際に、プライバシーの侵害にならないようにどの程度個人的な内容を扱うかという問題である。

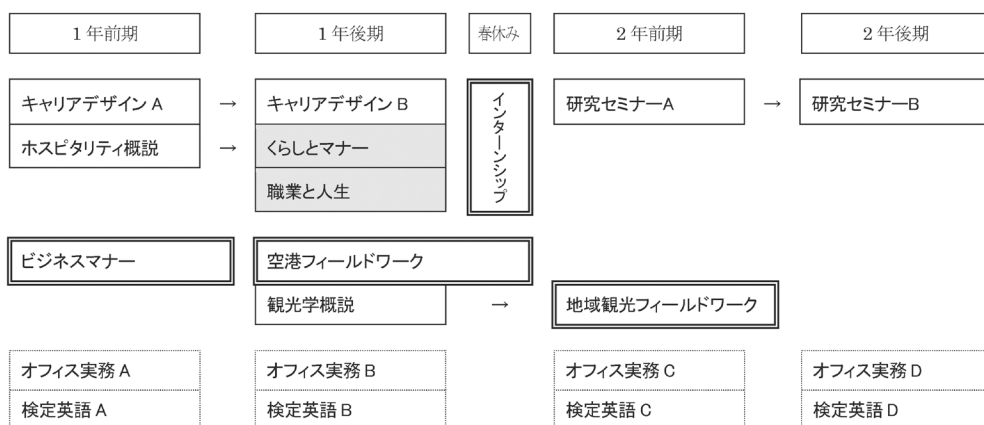
現行カリキュラムにおけるネイティブ・スピーカーの科目群の質は年々向上してきている。これはネイティブ・スピーカー教員全員が築いてきた素晴らしい「チームワーク」によるものである。彼らの責任感、熱意と教授力の高さに敬意を表する。

あえて、もしひとつ欠点を挙げるとするならば、教員が議論し合い意見交換を行うための正式な時間が設定されていないことである。授業の前後や合間などに心がけて意見交換をするよう努めているが、協働の実を上げるためには必要なことと考える。

6.2 「キャリア教育科目」 ～マナー教育との相乗効果で進路をサポート～

現行カリキュラムの中でキャリア教育に重点を置いて開講している科目は図2のとおりである。短大2年間の中で、教養教育科目と英語英文科専門科目、講義・演習科目と研修・体験型科目、資格取得を目指す科目が、「ながれ」と「つながり」をもって設定されている。キャリア教育については、教養教育科目「職業と人生」、進路支援委員会主導の「キャリアポートフォリオ」、さらには進路支援室スタッフの強力な支援体制等が、英語英文科カリキュラムをより効果的なものにしてきている。

図2 英語英文科におけるキャリア教育の「ながれ」と「つながり」



<実施状況>

本科のキャリア教育体系は、2011年度より現行の形をとっており、以下の3つの要素から成り立っている。1つ目は、自己理解を深めるとともに他者との関わりについて考え、生きていく上に必要な対人コミュニケーション能力を含む人間力の向上を図る「キャリアデザインA/B」や「ホスピタリティ概説」「くらしとマナー」などの“講義・演習型”授業である。2つ目は、前段の授業で培ったコミュニケーション能力を含む人間力の発揮に努めながら、社会人職業人としての実践力とは何かを経験し会得する「ビジネスマナー」や「空港フィールドワーク」「インターンシップ」「地域観光フィールドワーク」などの“研修・体験型”授業である。上記の授業には何れもキャリアカウンセラーや一般企業での実務経験を有する教員が関わっており、長年の経験から得た知識や情報は、学生がキャリアプランやライフデザインを考え描く上で一助となっている。3つ目は、資格取得を目指す科目である「英語検定A/B/C/D」や「オフィス実務A/B/C/D」などの授業である。学習内容の定着を図り受験に繋げることで、資格として履歴書に記載することができる。各授業には重複する内容が含まれており、何度も見聞きし経験することで、コミュニケーション能力の重要性を認識し習得が進むように構築されている。コミュニケーション能力は、企業が人間力として最も必要だと位置付けている能力であることを記しておく。

また、上記以外にも、教養教育科目として職業観や仕事へのやりがいを醸成する「職業と人生」が、キャリアカウンセラーにより行われており、英語英文科のキャリア教育に有益な結果をもたらしている。キャリアカウンセラーを含めた進路支援室との連携は、就職活動も含めた進路指導において重要な役割を担っている。

「キャリア教育」の面で、いかに現行カリキュラムが優れているかは、本年度からその認定が認められた「実践キャリア実務士資格」が物語っている。認定を求めて動こうとした矢先、協会が求める要件を既に満たしていることが判った。これにより、卒業後に一般就職を希望する学生は、1年次終了と同時に同資格を得て、就職活動の一助とすることができる。

<学生の変容>

本科には、当初から自分を表現することに長けている学生もいるが、可もなく不可もなくという評価を受け続けて、自己を主張することや、自分を理解してもらうための自己表現が不得手な傾向にある学生も見受けられる。授業を通し自己理解を深めていくと同時に、ノンバーバルコミュニケーションの重要性も習得することにより、学生は自己表現の方法を得て開花していく。“演習型”や“研修型”の授業を通してマナーを身につけ、コミュニケーションの実践を積むことで、自信に繋げていく学生も見受けられる。

また、進路支援室との関係が密であるため、就活に関する情報が得やすく、学生の室利用も活発である。就職率は、前々年度から2年連続して90%以上であり、今年度も昨年を上回るペースで就職が決まりつつあり、成果に繋がっている。

<改善点>

構築された授業体系は効を奏している面もあるが、学生各々の成長過程や特徴、職業観など様々な情報の共有が不十分であり、学生へのアドバイスに活かしきれていない現状がある。学生の進路や社会人として旅立ちの一助となるようなさらなる連携の方法を考える必要がある。

と思われる。

6.3 「子ども英語」 ～地域とつながる“お姉さんせんせい”～

2000年の菊川キャンパスからの移転の際、「幼稚園教諭二種免許状」の取得を可能にし、同時に子どもに英語を教えるノウハウを学ぶ「子ども英語」系の科目がスタートした。新しい領域だけに、教員にとっては専門分野を超えた新たな知識と教授法が求められることになったが、この時に見せた英語英文科教員の柔軟さと果敢さには頭が下がる思いである。

外部の子ども英会話学校との協賛で、2007年より非公式に導入した「小学校英語指導者資格（通称 J-Shine）」も、2010年には認定校となり、毎年10人前後が資格取得に至っている。同資格は、50時間もの指導実績を求められるため、本学附属の両幼稚園、常葉大学教育学部附属たちばな小学校に協力を仰ぎ、見学・実習の場を提供していただいている。

特に言及したいのは、生涯学習センター「リンク西奈」との協賛事業として2011年から実施している小学校1～3年生を対象とした講座「あそぼう！あそぼう！ABC」である。「英語を通して異文化に触れる機会を提供し、大学生と共に活動することで異世代交流を促す」ことを目的としており、地域貢献の一役も担っている。抽選で選ばれた20名に対し、月1回の6回シリーズで行っている。10月にはハロウィーン、12月にはクリスマスにちなんだ活動を用意し、楽しめる内容となっている（新妻、2012）。なお、ここでの様子は毎年のように『静岡新聞』に掲載されている。

<実施状況>

1年次は、指導法を演習形式で学ぶ「子ども英語 A/B」に加え、学園内の幼稚園・小学校および2年生の実習の様子を見学するとともに、早期英語教育の意義と現状を学んでいる。2年次には、両幼稚園およびリンク西奈での実習が続く。

なお、中学校英語教諭二種免許状の取得を目指す者ももれなく「子ども英語」を履修しており、中学校での教育実習にもプラスに作用している。

<学生の変容>

一連の活動（活動内容の検討→指導案の作成・検討→教材・教具の作成→実習に向け模擬レッスン→実習→実習後の反省）は、英語指導スキルのみならず人格形成にも大きく貢献するプロジェクト学習である。緊張した面持ちでスタートし、思い描いたようには実践できない苛立ちや期待に反する子どもたちの反応を経験しながらも、回を追うごとに総合的スキルを高めていく様子は感動に値する。

<改善点>

一般に「子ども英語」と言っても、思い描く概念は人それぞれである。たとえば、2012年にスタートした保育英語検定は、保育のすべてを英語で行うイメージが想定されており、乳幼児に対する声掛けも保護者との対話も英語で行う前提で作問されている。

一方、附属の両幼稚園のように、外国人講師による英語活動により、異文化理解と外国語としての英語への関心を促すことを主な目的としているところも多いだろう。

英語英文科で培った「子ども英語」関連の学修内容を、希望する保育科の学生たちにも提供

したいと考えるが、その際に、乳幼児に対する英語活動の位置づけについては議論が必要であろう。現在改革の真っただ中にある小学校英語教育の動向に注視しつつ、「子ども英語」に関する視座を明確にし、それとともに各関連科目の達成目標、シラバスを吟味しなければならないだろう。

6.4 集大成「卒業研究」の意義

本科においては長年に渡り「卒業研究」がカリキュラムに組み込まれてきた。

<実施状況>

学生個々の問題意識に基づいて各自研究テーマを設定し研究成果をまとめるこの科目は、学生に能動性と多面的な学習スキルの活用を要求するものである。内発的かつ適切な研究テーマの設定ができた学生の中には短期間に目を見張る成長を示す学生も現れる。過去、必修科目としたことはないが、学生には履修することを奨励し、現在のカリキュラムにおいては選択科目だが科内必修として2年生全員が履修する。

年度当初に各学生が指導教員を選択した後、各教員の講義および個別指導を通して、学生は個々に自分の問題意識と向かい合い、研究テーマを設定し、調査、資料収集、文章構成等の各過程を経て、最終的には卒業論文の形で研究成果を提出する。

1993年度以降は、英語英文科の学生および教員で構成する英語英文学会主催「卒業研究発表会」にて、各セミナーより選出された学生が各自の研究の概要を口頭発表する機会を設けている。日程等の諸事情から長らく2年生のみで行なってきた発表会も、2012年度以降は1年生も出席させての開催となり、上級生の経験を継承する場とすることができたことは喜ばしいことである。

提出後の卒業論文については、優れたものを上述の英語英文学会の会誌である『常葉英文』に掲載する。また、論文を提出した全学生の氏名と研究題目のリストも掲載される。同誌は、当該学年（2年生）、1年生、次年度の新入生に配布される。

<学生の変容>

研究テーマを自ら興味・関心を持つ事項に設定することにより、学習姿勢が受動的なものから能動的なものに変化する場合が多々みられる。従前なら、担当教員との相談後、その指示に従うだけだったものが、次第に、自ら進んで調査方法（アンケートの内容等）を考案し、教員に諮るようになるなどの成長がみられる。また、1年生も参加する卒業研究発表会の存在が、2年生のプレゼンテーションを向上させている。一方、1年生には、各発表についてコメントを書かせ、発表会終了時に回収している。それを読むと2年生の発表に感銘を受け、教員への積極的な質問も増加するなど、卒業研究発表会への出席が、次年度に受講する「研究セミナー」に対するプラスの意識付けとなっていることが伺える。

<改善点>

当初、「研究セミナー」を含む現行カリキュラム策定時には、この科目が入学以降の学習の総仕上げの位置を占めるものとの考えであったが、すべての学生にとって、「研究セミナー」がそういった位置づけの科目となっているかを見ると、まだ考慮の余地があると思われる。

学生の自主性を引き出すことに重点を置き、学生の研究テーマがセミナー担当教員各自の専門と乖離しても許容している場合が少なからずある。例えば、セミナー担当者の専門が英語学であっても、そのセミナー所属学生の研究テーマが英語を扱わないということが生じる。学生の研究の質を一定の水準に保とうと考えれば、学生の研究テーマは指導教員の専門の範囲内に収まっている方が好ましいと思われるが、教員側から研究テーマ設定にある種の枠を設定すると、学生の内発的な興味関心と相容れないことがあるのである。学生の自主性と研究の質の担保のバランスをとることには現在のところ明快な解答があるわけではないが、今後とも考え続ける必要があろう。

6.5 「幼稚園教諭二種免許状」「中学校教諭二種免許状」関連科目

英語英文科では、いわゆる2つの国家資格が取得可能となっている。もちろん履修者は幼稚園教諭、中学校教諭を目指す者が中心であるが、ここでは敢えて人格形成、人間教育の側面からその効用を強調したい。

<実施状況>

幼稚園教諭を目指す者は、本学保育科を目指したが夢かなわず、本科で幼稚園免許が取得できることを理由に入学したという学生がいる。一方、中学校教諭を目指す者は、入学してから本科で中学校教諭免許が取得できることを知り、教職課程を選んだという学生である。1年次の人数は、最近、前者が10名～15名程度で、後者は1～5名程度である。

これらの学生は、英語英文科の必修・選択の科目以外に、教職関係の科目を履修することになり、密なスケジュールで学生生活を送ることになる。大学に入ったら余裕ある生活が過ごせるという甘い考えを捨てざるをえなく、本格的な学びに追い込まれるという環境に置かれることになる。

次の項でも述べるが、学生は大きな変容を見せる。今までにこんな風に学びを強いられた経験はないであろう。しかし、実習を含めさまざまな学びから精神的に成長したことを実感することが多々見受けられる。

<学生の変容>

幼稚園教諭を目指す者は、多くの保育科の学生に交じって授業を受けている。同じ短期大学の学生であるからそこまでピリピリしなくてもと思うが、保育科に入れなかったという経歴を持つ学生は揺れ動く心情があらうと思われる。最近では、保育科の先生方も英語英文科の学生に心情面での配慮をしてくださり、ありがたく思う。

教育実習報告会での学生一人一人の表情は、やり終えた充実感と安心感で非常に柔らかくなっている。自分にできるかという不安が実習園でのご指導で、希望に変わっていく学生がほとんどである。免許を取得して幼稚園に就職する学生ばかりではないが、社会人としての今後の人生に大きな影響を与えることになることは確かである。自信がなかった学生も実習後は背筋が伸びているような印象さえ受ける。

また、中学校教諭を目指す者は、日本語日本文学科、音楽科の学生と共に学ぶことになる。実に仲の良い学びの集団ができ、ここでの学びが最高という評価をする学生もいる。ここに集う学生は、性格的に素直で頑張り屋が多い。つまり、よい出会いができたことがお互いの

頑張りにつながっているのである。

最近、音楽科の専攻科から3名の中学校教諭が誕生した。音楽科の学生は自分の可能性が高まり、意欲も高まっている。英語英文科には専攻科がないので、教員採用試験の一次合格を夢見て頑張ることになる。ここ2年連続で、一次合格者を出していることは評価に値する。二次合格は難しいかもしれないが、挑戦できたという歴史は残る。今後、小学校で英語が教科になれば、英語の教員免許を持つ教員が大量に必要となる。今、中学校に就職は難しいが、小学校教員としてぜひお願いしますという話があるかもしれない。こういうことを話すと、学生の目が輝くように見え、成長を感じる瞬間でもある。

<改善点>

幼稚園教諭を目指す者は、認定こども園制度の導入により幼稚園免許と保育士資格と両方を必要とする時代になった。しかし、幼稚園のなかには入園児が確定する時期（年度末）に教員不足が生じていることもある。したがって、英語英文科としては、免許を生かし幼稚園に就職し、余裕が出たら保育士資格を取得するように指導していくことがベターではないか。また、特に1年次において、幼稚園教諭になったら常葉大学短期大学部の品位を下げかねないという危機感を感じる学生もいる。個に応じた的確な指導が求められている。

中学校教諭を目指す者は、小学校の教員免許もあれば学校への就職の可能性は広がる。小学校の英語教員として力量は十分と思われる学生も在籍している。教職への道を広げるため中学校教諭二種免許の取得した上で、「小学校教員資格認定試験」による小学校教諭二種免許状の取得も将来的に考えるよう指導を始めている。合格率は低くハードルは高いが、「教師になりたいという熱意」があれば、実現不可能ではない。今までのように、四年制大学への編入も視野に入れて指導していくが、その他の可能性を模索していく必要がある。

以下は、ある学生の『教育実習報告書』からの報告の一部である。

- ・二週間という短い期間の中で、教育現場の実態と厳しさ、また教員としての使命について考えることができ、大変貴重な経験をさせていただけたことに感謝しています。教師という仕事は、生半可な気持ちでは決して務まらないことを実感するとともに、教えることの難しさと楽しさを感じることができました。
- ・今後の自分の人生において、この二週間の実習で得たものは必ず役に立つと思います。お世話になった先生方や実習生のみなさん、生徒と過ごした日々を糧に今後も頑張っていきたいと思います。

7. カリキュラムの効果を高める正課外教育

本学全体として取り組んでいる正課外教育の中でも、特に本科のカリキュラムの効果を高めていると思われる活動について、(1) 担任制によるコミュニケーションの促進、(2) Student Teacher Forum、(3) 学生会・橘香祭実行委員等への積極的な参加、の3つを取り上げる。

7.1. 担任制によるコミュニケーションの促進

本学では担任制による学生支援体制を整えており、半期に1回個人面接を実施し、クラス

タイムによって定期試験や成績等に関するガイダンスを徹底している。その中でも本科において特徴的な点は、クラスタイム実施の際にも必ず学年全体で指導する場を設けて、各担任教員が学年全体を把握し、コミュニケーションの場を確保するよう試みていることである。さらに、担任による学年間の情報交換も併せて行われており、学年やクラスの枠組みを超えて教員間の学生に関する情報共有に努めている。

このような支援体制によって、学生は担任教員だけでなく、相談内容に応じて異なる教員にアドバイスを求めることがしやすい環境を整えているといえる。教員側も学生の情報を共有しているため、学生にとっては様々な視点から支援を受けることができ、どんな場合でも悩みや相談に対処することができる。学生も、「何かあれば担任教員にまず相談できる」という環境により、安心感を得られると共に、担任教員とのコミュニケーションの中で「報告・相談・連絡」という社会人としてのマナーも身につけることができる。また、担任教員と保護者との面談も希望者については年に1回実施されている。このような環境に対する安心感や教員と学生間のコミュニケーションの円滑さが入学後の信頼関係をより深めていく一端を担っていると思われる。

7.2. Student Teacher Forum

英語英文科では、2012年度より、科をより良いものにするために学生と教職員誰もが自由に話し合いに参加できる Student Teacher Forum (以下 STF) を設け、定期的に交流会を行い、ニュースレターも年6～7回発行している。

科全体の交流会は年に3回程度、昼休みを利用して行われている。1・2年生と教職員が混ざり合ってグループに分かれ、昼食をとりながらお互いのことを話し合い、英語でアクティビティーに参加している。学年やクラスの垣根を超えてコミュニケーションを図ることができる場となっている。

また、ニュースレターの発行は、学生のボランティアによって行われている。作成に関わる学生たちは、課外授業や学内イベントの様子などを英語でレポートしたり、コラムを書いたり、写真を精選してレイアウトしたり、教員とも相談しながら、毎回魅力ある紙面になるよう取り組んでいる。発行されたニュースレターは科の学生と教職員全員に配布され、全員が科で実施された主な活動等についての様子を知ることができる。また、英語によるレポートは、お互いの英語学習のモチベーションアップにもつながっているように見える。

その他にも、STFでは、大学案内やオープンキャンパス等の募集活動に関する学生からの率直な意見を聞くなど、科をより良くするためにはどうしたらよいか、学生自身も考え、教職員と話し合っている。学生の視点から魅力あるキャンパスライフを発信していくことが、主体的なコミュニケーション活動を促すことにも役立っている。

7.3. 学生会・橘香祭実行委員等への積極的な参加

英語英文科では、学生会や橘香祭実行委員といった学内組織に参加している学生の割合が非常に高い。現在学生会には25名、橘香祭実行委員には25名の本科の学生が所属しており、これは科全体の人数の32.9%に相当する。特に、11月に行われる橘香祭に向けて半年以上前から準備を進めていく過程において、他学科の学生とコミュニケーションを図ったり、担当業務のメンバー間でリーダーシップをとったり、授業とは異なる意味で様々なコミュニ

ケーション活動を体験することになる。高校生までの間にこのような活動にほとんど参加したことがない学生もいるため、行事の企画・運営から実施に至るまで、自らの手で協力して活動する貴重な体験の場になると共に、行事を成功させた満足感や達成感が学生自身の自信につながっている様子がわかる。

また、このような活動に参加していると、人前に立って話す場面も多々出てくる。本科の授業でホスピタリティやマナーについて学んでいるが、学生自身が大勢の人の前で実践することによって、あらゆる場面で学んだことの実践の場であるということに自覚し、次の実践へとつなげ、学生自身の意識の向上に役立っている。参加している学生もその達成感と自信の向上を感じているため、後輩に参加するよう勧め、毎年多くの学生が参加する状況が続いている。

7.4. 改善案

現在、大学教育におけるあり方において、正課外教育も重要視されている。ここで取り上げた活動はすべて、学生同士、また、学生と教員間の真のコミュニケーション活動であり、言語に関わらずお互いを理解し合い、様々な体験を通して自分の価値観を高めていくものである。授業でも様々な体験ができるようなカリキュラムを整えているが、さらに、このような授業外での正課外活動に積極的に参加しようという姿勢を促し、学生が主体となって活動していくことができるようになることが望まれる。現在は、担任教員が中心となり、学年や科全体で学生にこのような活動への参加を促している状況である。そういった後押しがなければなかなか積極的に行動することができない学生も増えてきているため、自主的に行動できるようになるには時間がかかるかもしれない。しかし、2年間という限られた期間であるため、初期指導の段階では教員の積極的な関与も必要であるだろう。理想的には、STFや学生会等において、2年生がリーダーシップを発揮して1年生を育てていくことができるとよい。縦のつながりを強化することによって、担任教員に相談するだけでなく、学生同士でも相談し合えるような場が増えていくだろう。そうすれば、より自立した学生に成長していくことと思われる。

8. 今後の課題

これまで、主に英語英文科の特長を述べてきたが、課題も多く残されている。短期大学部のみならず、全国の英語系学部・学科は、大都市とその周辺及び有名大学を除けば、学生募集に苦慮しているところも少なくない。外国語「を」ではなく、外国語「で何ができるか」を求められる時代の要求に、大学としてどのような教育内容を提供し得るのかを明示する必要がある。社会が即戦力となり得る若者を求める傾向が強い中、外国語系学部・学科はその到達目標をどこに置くのかを問われている。その際には、目まぐるしく変動する社会の情勢に振り回されるばかりでなく、どのような人材を世に出し、どのような世の中での活躍を期待するのかといった一種の「夢」を抱き続けることも大切であろう。

従ってこれまで以上に日本人教員と外国人教員とが、共に働きながら共に学び合うような、柔軟にして果敢な構えを保つことが求められるだろう。各授業担当者がカリキュラムポリシーを十分に満たす授業を行うのはもちろんのこと、それぞれの科目の「つながり」や「ながれ」にも配慮し、組織としての教育力を高めていくことを目指さなければならない。

外国語学習の道のりは長い。それゆえ学習に向け自己コントロールのできる学習者への成長をサポートする必要がある。第二言語習得研究や成長する英語学習者を対象とする研究などにより自律学習者の育成を促す手法も紹介されている。学習ポートフォリオを活用した学生支援には成功例も見られる。

さらに、「使える英語」の成長の度合いを図る「物差し」と、妥当でありかつコスト面でも利用可能な評価方法も必要である。昨今注目されている Can-do リストや外部テストの導入も検討されるべきであろう。

では、最後に、前述のボイヤーらとも通ずるアメリカ高等教育学会 (AAHE) などが掲げた「優れた授業実践のための7つの原則」に注目したい。わが国では、名古屋大学高等教育研究センターが「ティップス先生からの7つの提案」と題して、日本ヴァージョンとも言える7つの重点項目を挙げ、独自のサイトで紹介している。

- 提案1 学生と接する機会を増やす
- 提案2 学生間で協力して学習させる
- 提案3 学生を主体的に学習させる
- 提案4 学習の進み具合を振り返らせる
- 提案5 学習に要する時間を大切にさせる
- 提案6 学生に高い期待を寄せる
- 提案7 学生の多様性を尊重する

英語英文科としては、これらのうちの提案4と提案5について、より配慮した指導体制が必要だと感じている。これらは自律的学習には欠かせない要件である。在学中一貫して利用する「システム」として構築し、学生生活支援ソフトに組み入れた形での利用し成功を取めた例が紹介されているが、コストの問題がある。可能な範囲で何をどう導入するのか考えていきたい。

今一つ、提案6に配慮する必要もあるであろう。期待を寄せるからこそ「厳しさ」を持って学生と接することが真の「優しさ」であることを忘れず、努力を重ねていきたい。

英語英文科の学びについて、在学中にその本当の意義を理解し切れる者はほとんどいないかもしれない。いくらか時間が経過して、その経験について自らの言葉で表し直す時になってはじめて「真の経験」となるのである。即効性が求められる昨今ではあるが、こうした長い目で見た教育力こそ建学の精神に基づいて定められた本学の教育目的を果たすものである。

参考文献

- アーネスト L. ボイヤー (1988). 喜多村 和之、伊藤 彰浩、舘 昭訳『アメリカの大学カレッジ』東京：リクルート出版 p.174.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2002). *Handbook of self-determination research*. Rochester: University of Rochester Press.
- 廣森友人 (2006)『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』東京：多賀出版
- Maslow, A. H. (1970a). *Motivation and Personality*. New York: Harper & Row.

- 小田寛人 (2007)「英語英文科「幼児英語コース」の歩みとその指導 (1)ーコース開設準備から第一期卒業生誕生までー」『常葉学園短期大学紀要』第 38 号 pp.1-17.
- 小田康友・増子貞彦 (2006)「医学教育の現在と佐賀大学医学部の挑戦ーPBL の理念と課題ー」『大学教育年報』第 2 号 (佐賀大学高等教育開発センター) pp.63-65.
- 永倉由里 (2009)「常葉学園短期大学英語英文科生の実情と改善の方向性」『常葉学園短期大学紀要』第 40 号 pp.1-20.
- 永倉由里 (2013)「英語授業で動機づけと自律を促す意義とその可能性」『常葉学園短期大学紀要』第 44 号 pp.33-46
- 名古屋大学高等教育研究センターウェブサイト「ティップス先生からの 7 つの提案」
http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seven/faculty/index_7.html
- 新妻明子 (2012)「西奈子ども英語講座 あそぼうあそぼう ABC 実践報告」『常葉英文』第 32 号 pp.133-143.

資料1 自己決定理論に基づく内発的動機の3要素に関する質問紙

(5件法: 5=よく当てはまる ←→ 1=全く当てはまらない)

1	英語の授業で勉強することは、すべて教師が決めている。(反転)	自律性
2	英語の授業の課題内容には、選択の自由が与えられている。	自律性
3	教師は英語の授業の進め方などを相談してくれる。	自律性
4	英語を学ぶに当たって、私の意見は重要視されている。	自律性
5	英語の授業でどんなことが勉強したいか、述べる機会がある。	自律性
6	英語の授業を受けるとき、プレッシャーを感じる。(反転)	自律性
7	英語の授業では、教師や友達から褒められることがある。	有能性
8	英語の授業での自分の頑張りに満足している。	有能性
9	英語の授業でよい成績が取れると思う。	有能性
10	英語ができないと思うことがよくある。(反転)	有能性
11	英語の勉強はやれば出来ると思う。	有能性
12	英語の授業では、達成感を味わうことができる。	有能性
13	英語の授業を一緒に受けている友達とは、仲がよいと思う。	関係性
14	英語の授業では、友達と協力して勉強できていると思う。	関係性
15	英語の授業を一緒に受けている友達は、「本当の友達」だと思う。	関係性
16	英語の授業では、友達同士で学び合う雰囲気があると思う。	関係性
17	授業でのグループ活動には、協力的に取り組んでいると思う。	関係性
18	英語の授業には、和気あいあいとして雰囲気がないと思う。(反転)	関係性

資料2 英語英文科カリキュラム・マップ

	授業科目名	必修	選択	CPの3つの柱			能動的行動
				CP① 英会話	CP② 異文化	CP③ キャリア	
日常英会話	Oral A	[1]		◎	○		要集中
	Oral B	[1]		◎	○		要集中
	Oral C	[1]		◎	○		要集中
	Oral D	[1]		◎	○		要集中
各国事情	Culture Studies A	[1]		◎	◎		要集中
	Culture Studies B	[1]		◎	◎		要集中
	Culture Studies C	[1]		◎	◎		要集中
	Culture Studies D	[1]		◎	◎		要集中
基礎スキル	Basic Skills A	[1]		◎	○		要集中
	Basic Skills B	[1]		◎	○		要集中
	Basic Skills C	[1]		◎	○		要集中
	Basic Skills D	[1]		◎	○		要集中
応用スキル	Advanced Listening		[1]	◎	○		要集中
	Advanced Speaking		[1]	◎	○		要集中
	Advanced Reading		[1]	◎	○		要集中
	Advanced Writing		[1]	◎	○		要集中
テーマ別演習	Life English A		[1]	◎	○		要集中
	Life English B		[1]	◎	○		要集中
	Life English C		[1]	◎	○		要集中
	Life English D		[1]	◎	○		要集中

	授業科目名	必修	選択	CP① 英会話	CP② 異文化	CP③ キャリア	能動的行動
基礎と発展	カレッジ英語 A		2	○	○		
	カレッジ英語 B		2	○	○		
	研究セミナー A		2	○	○		
	研究セミナー B		2	○	○		
異文化理解	異文化コミュニケーション A		2		◎		
	異文化コミュニケーション B		2		◎		
	英米文学		2	○	○		
	英語学		2	○	○		
英語体験	語学キャンプ		[1]	◎	◎		体験型
	海外短期留学		[3]	◎	◎		体験型
	Eメールダイアリー A		[1]	◎			体験型
	Eメールダイアリー B		[1]	◎			体験型
留認定学	海外長期留学 A		[6]	◎	◎		研修型
	海外長期留学 B		[6]	◎	◎		研修型
英語資格	検定英語 A		2	○		◎	
	検定英語 B		2	○		◎	
	検定英語 C		2	○		◎	
	検定英語 D		2	○		◎	
実務資格	オフィス実務 A		2			◎	
	オフィス実務 B		2			◎	
	オフィス実務 C		2			◎	
	オフィス実務 D		2			◎	
サービスマン・接遇	ホスピタリティ概説		2			◎	
	観光概説		2			◎	
	空港フィールドワーク		[1]			◎	研修型
	地域観光フィールドワーク		[1]			◎	研修型
デザイン・インターンシップ	キャリアデザイン A		2			◎	
	キャリアデザイン B		2			◎	
	ビジネスマナー		[1]			◎	研修型
	インターンシップ		[1]			◎	研修型
子ども英語	子ども英語 A		2	○		◎	
	子ども英語 B		2	○		◎	
	早期英語教育概論 A		2	○		◎	研修型
	早期英語教育概論 B		2	○		◎	研修型
	英語科教育法		2	○		◎	
幼児スキル	ピアノと歌		[2]			◎	体験型
	子どもの音楽		[1]			◎	体験型
	子どもの造形		[1]			◎	体験型
	子どもの運動あそび		[1]			◎	体験型
資格認定	英語資格 A		[1]			◎	
	英語資格 B		[1]			◎	
	実務資格		[1]			◎	
	総合基礎講座		1			◎	

- ※CP①：「使える英語」の習得に向け、特に「英語で話せるようになること」を目指し、英語母語話者（ネイティブ）の外国人教員による授業を多く設定
 CP②：異文化への理解を深め、国際性や人間性を身につけるように工夫
 CP③：卒業後の進路を支援するためのキャリア教育と各種資格・検定に向けた科目を設定